

2016年度 法政大学国際化に関する大学評価報告書（経営部門）

18歳人口が再び減少に転じるいわゆる2018年問題を目前に控え、大学改革は、個々の大学の持続可能性を左右する待ったなしの課題となっている。

同時に、大学がより良き方向に変わることは、我が国社会の持続可能性にとっても不可欠の要素であり、グローバル化への対応、イノベーション、職業能力の向上、地域創生など様々な面において大学が果たすべき役割は一層増大しつつある。

このような中、法政大学が「課題解決先進国日本からサステイナブル社会を構想するグローバル大学の創成」をテーマに掲げ、「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択され、これを推進していることは、大規模私立大学のグローバル化モデルを創り上げることとはもとより、真に実効ある大学改革の方法やプロセスを開発・実践し、広く社会に示すという点で、極めて大きな意義を有している。

2016年度は本事業の3年目であり、SGU構想で掲げた施策が具体的な制度や仕組みとして如何に整備されてきたか、運用が本格化するにつれてどのような課題が明らかになりつつあるかといった観点を中心に、4人の外部評価委員がそれぞれの知識や経験に基づき、書面及びインタビューを通して評価を行った。

インタビューの中で、SGUで法政を発展させるという意識が全学的に広がりつつあるとの認識が示されたが、本評価がSGUの着実な推進を通じた法政大学のさらなる発展の後押しとなることを期待したい。

1. 評価の目的

法政大学では、教学・事務部門各諸単位の自己点検・評価のみならず、経営部門（大学全体）の評価を大学評価委員会の外部委員が行うことで、大学の自主的かつ自律的な改善・改革活動を支援している。

経営部門の評価は「大学評価」と「国際化評価」の2点について実施しており、本報告書はそのうちの「国際化評価」に関するものである。

2. 評価対象

法政大学、学校法人法政大学

3. 評価方法・評価項目

以下の評価項目について、大学側から提出された資料を評価者が通読した上で、役員・役職者インタビューにより書面では得られなかった情報や役員・役職者の方針・考えを確認することにより、その達成状況および対応状況を評価した。

評価項目ごとの担当者は置かず、下記「5. 評価者」に記した委員4名が全項目を評価することとした。

[評価項目]

- (1) SGU の取り組みの進捗状況について
- (2) 新規英語学位プログラムの開設後の状況について
- (3) 派遣・受入れ学生の生活支援、キャリア支援および危機管理について
- (4) グローバル施策の内部質保証システムについて

4. 評価経過

2016年5月14日	第1回大学評価委員会 評価計画策定
2016年5月18日	常務理事会 評価計画および評価の実施を承認
2017年3月3日	役員・役職者インタビュー
2017年3月13日	評価結果案完成
2017年3月13日～17日	評価結果案 事実誤認確認期間
2017年3月18日	第4回大学評価委員会 評価結果を承認
2017年3月22日	常務理事会 評価結果を了承

5. 評価者

法政大学大学評価委員会 経営部会国際化評価グループ委員

主査 吉武 博通 (筑波大学ビジネスサイエンス系教授 (前大学研究センター長))

倉林真砂斗 (城西国際大学副学長・点検評価情報管理部長・環境社会学部教授)

古川 佑子 (一般社団法人日本国際学生技術研修協会常務理事・事務局長 (元独立行政法人日本学術振興会ロンドン事務所長、元東京理科大学国際センター長))

山田 史郎 (同志社大学文学部教授 (前副学長 (国際担当)・国際化推進室長))

6. 評価資料

- (1) 大学のグローバル事業が概観できる資料
 - a. 2016年度 法政大学グローバル事業概要
 - b. グローバル事業の実績を示す数値データ
 - c. グローバル戦略本部体制図・委員会構成メンバー一覧等
 - d. 英語学位プログラムの検討体制図等
 - e. 英語学位プログラム生等の学生支援に係るプロジェクト体制図・構成メンバー一覧等
 - f. 「法政大学グローバル化戦略」
- (2) SGU の取り組みの進捗状況について
 - a. 2016年度 SGU 事業ロードマップ (進捗状況確認表)
 - ① 「平成 26 年度 スーパーグローバル大学等事業『スーパーグローバル大学創成支援』構想調書 (法政大学)」
 - b. 「スーパーグローバル大学等事業 スーパーグローバル大学創成支援 『平成 28 年度フォローアップ調査票』」
 - c. 「日本語教育プログラム」(2017 年度設置予定) の概要がわかる資料
- (3) 新規英語学位プログラムの開設後の状況について

- a. 新規英語学位プログラムに関する調書
 - ・経営学部経営学科 Global Business Program (GBP)
 - ・人間環境学部 Sustainability Co-Creation Programme (SCOPE)
 - ・大学院総合理工学インスティテュート (IIST)
 - ・イノベーション・マネジメント研究科 Global MBA Program (GMBA)

- (4) 派遣・受入れ学生の生活支援、キャリア支援および危機管理について、グローバル施策の内部質保証システムについて
 - a. 2016年度 国際化評価に係る調書(留学生の学生支援・危機管理、グローバル施策の内部質保証システム)
 - b. GBP/SCOPE 受け入れ準備状況、GBP/SCOPE ガイダンス日程、The Global Business Program Orientation for freshman、Fall 2016 Student Center Guidance

- (5) パンフレット・手引き等
 - a. 履修ガイド・パンフレット等 (GBP・SCOPE・IIST・GMBA)
 - b. 「HOSEI UNIVERSITY ESOP」
 - c. 「2016年度 交換留学生の手引き」
 - d. 「外国人留学生ハンドブック 2016」
 - e. 国際インターンシップ・ボランティア、短期語学研修募集要項
 - f. 「HOSEI UNIVERSITY FACT BOOK」
 - g. 「TOP GLOBAL UNIVERSITY HOSEI 2016」
 - h. 「GO GLOBAL HOSEI」

7. 役員・役職者インタビュー出席者

佐藤良一担当常務理事、福田好朗副学長(国際担当)、奥西好夫経営学部長(GBP)、國則守生人間環境学部 SCOPE 運営委員会委員長、佐藤裕二情報科学研究科長(IIST 連絡調整会議副議長)、高木晴夫イノベーション・マネジメント研究科 GMBA プログラムディレクター

近藤清之教育支援統括本部長、松井哲也グローバル教育センター事務部長
(同席者)

菊池克仁入学センター長、日野好幸グローバル教育センター国際交流課長、半妙宏ーグローバル教育センター国際支援課長、沖田吉史グローバル教育センターグローバルラーニング課長

(事務局)

総長室付大学評価室大学評価担当

8. 評価結果

「大規模私大のグローバル化を先導する取り組みへの評価と期待」

吉武 博通

(1) SGU の取り組みの進捗状況について

SGU 構想に掲げた制度・仕組みがほぼ整ってきており、具体的な施策の実行という点では概ね順調に進捗していると評価することができる。本事業の推進にあたり、学内での合意形成に注力してきたこともあり、SGU で法政大学を発展させるという意識が全学的に広がりつつあることを特に高く評価したい。

2016 年度の数値目標に対する実績という面では未達項目も多いが、全体的に右肩上がりの傾向を示している。整ってきた制度・仕組みを適切かつ効果的に運用し、これらの施策を一つ一つ成果に繋げていくことが求められる。

本事業の重要な目的の一つである英語力の向上については、ERP（英語強化プログラム）を開講するなどして力を入れているが、ERP の申込者数と延べ人数が、2015 年度と比較してやや頭打ち傾向にあることは気になるところである。外国語力向上に関する学生への動機付けをどのようにして行っていくかは今後の大きな課題であると思われる。

(2) 新規英語学位プログラムの開設後の状況について

構想に掲げた全 6 コースのうち 2016 年度は GBP、SCOPE、IIST の 3 コースを開設している。

このうち GBP については、入学定員 10 名を満たすことができたものの、生活行動面の問題もあり、学生間の成績のばらつきが課題として挙げられている。また、SCOPE についてはコースの内容を理解してもらうことに一層努力する必要があるとの説明があった。

英語学位プログラムの運営には多大な労力やきめ細やかな対応が求められ、また開設されたばかりであることから、初年度の経験を次年度以降に活かしながら、根気強く定着させていってほしい。

(3) 派遣・受入れ学生の生活支援、キャリア支援および危機管理について

派遣・受入れ学生の生活支援、キャリア支援、危機管理のいずれも、きめ細やかな対応を行っており、総じて適切に実施されていると評価できる。

その上で特に課題として挙げるならば、派遣留学生に対する経済的支援の充実と受入れ学生のキャリア支援であろう。

経済的支援の充実は大学の財政負担の増大につながるため容易ではないが、派遣を拡大しようとするならば、この問題の解決に工夫が必要となる。目的を派遣留学支援に特化した寄付金なども一つの方策として検討すべきであろう。

また、日本国内での就職または日本企業の海外現地法人での就職を目的に留学してくる学生が増加することが予想され、生産年齢人口が減少する我が国にとっても望ましい傾向と思われる。優秀な留学生を受入れ、日本語と日本文化を学んで日本国内または日本企業の海外現地法人に送り出し、彼ら彼女らが活躍すれば、そのことが法政大学のブランドを一層高めることにもつながるはずである。このような視点から、受入れ留学生に対するキャリア支援の充実に一層力を入れていただきたい。

(4) グローバル施策の内部質保証システムについて

構想に掲げた施策の進捗について、推進部門において適切に自己点検・評価が行われており、その結果が全学レベルで共有・認識されている。

内部質保証の基本は、それぞれの教育研究単位で、PDCA を自律的に回すことであり、その状態を定着させるべく、引き続き努力いただきたい。

特に、データの整備と共有化はその基盤として重要である。いわゆる IR の重要性が強調されているが、その面でも他大学をリードするような仕組みを整え、定着させることを期待したい。

「2016 年度の国際化並びにグローバル事業に係る評価」

倉林真砂斗

SGU の取り組みについては、担当・推進部署を学内で明確に位置づけ、既定のスケジュール案に従って取り組み、成果の視覚化が概ね達成できている。

2016 年度には、英語による「グローバル・オープン科目群」として 72 科目が開講され、延べ 1300 名の学生が受講している。学生の授業評価を踏まえつつ、キャンパス特色を活かした一層の充実を期待するところ大である。また、新規の英語学位プログラムを立ち上げたことにより、新しい人材の発掘や育成の可能性を切り拓いており、現状を踏まえた課題の克服に期待したい。さらに、日本語教育プログラムを新規に起動させたことで、留学生の受入形態に応じた日本語学修も促進されるであろう。

「課題解決型フィールドワーク」は現在、準備中とのことであるが、“自分の目で見て考える” 機会や場の創出という点において、国内実施ならでの工夫と、持続的な取り組みに向けた仕組み作りが望まれる。また、外国人留学生である GMBA 生のインターンシップに関しては、自治体を中心に受け入れ先を積極的に開拓しており、多角的な日本理解の促進、及び生活に密着した日本語修得、さらには地域ニーズの把握と対応等の諸点において成果をあげている。

環境整備に関しては、混住型の学生寮を運営し、学生チューターやレジデント・アシスタントを配するなどして留学生支援を行うとともに、日本人学生のリーダーシップ養成にも資するものとしている。また、専門職としてグローバル人材キャリアアドバイザーを配し、留学生の学修成果を活かす場や機会の確保に繋げるよう努力している。

既に設置・運営されている海外拠点に関して、留学生募集はもとより、日本人学生・教職員の当該国・地域における活動への支援、卒業生のネットワーク作り等、多機能化が図られることで、業務の効率化やリスクの低減も期待できる。この点に関して、今後の検討を望みたい。

国際化に係る取り組み成果の可視化について、「グローバル・ポイント制」の周知が継続的になされ、エントリーする学生が増加した。全学的な TOEIC 受験率が課題として認識されているとのことであるが、当該制度の普及・拡大が図られることで、ポイントとされる諸活動も相乗的に促進されることが期待できる。さらなる工夫を重ねて持続的に取り組まれることを期待したい。また、既に IR に関して、多角的な取り組みの成果を可視化し、持続的な改善へと繋げる環境整備を進めている。

総じて、国際化に係る事項及びグローバル事業に積極的に取り組んでおり、若手職員が自発的に勉強会を催すなど、自律的な側面が色濃く現れている点が高く評価できる。

(1) SGU の取組みの進捗状況について

SGU ロードマップに従い、順次開設科目を増やし、受講学生数も順調に伸びていることは高く評価される。SGU に採択されたことにより、法政大学のキャンパスそのものの国際化が次第に標準化されてきたように思える。英語を学ぶから英語で学ぶことが普通になり、キャンパスのなかで英語が聞こえる状況になってきている。国際的に通用する大学を目指し、国際競争力を意識されておられることがキャンパス全体に認識されるようになり、あたりまえのことになっていく傾向で、これが本当の国際化かもしれない。SGU に採用されたことは大学の誇りになるべきで、このことが保護者や卒業生にも浸透してきたことはよろこばしい。

(2) 新規英語学位プログラム開設後の状況について

英語の学位プログラムについては、日本で、あるいは日本企業に就職したい留学生にとって日本語がアカデミックレベルでなくとも日本の企業戦略や企業経営について学べる貴重なプログラムである。教員の先生方にとっては、日本語での高度な内容を英語で教えるということで、かなりご負担になる場合もあるのではないかと心配もあるが、各キャンパスにアカデミック・サポート・サービスが設置され、英語で授業を行うためのミニ講座を実施されるなど、教員に対するサポート体制も整っている。

(3) 派遣・受入れ学生の生活支援、キャリア支援、及び危機管理について

昨年度の評価項目「生活支援、修学支援」に新たに「キャリア支援」が評価項目に加えられたが、このことは日本人学生のみならず留学生からの就職支援の要望の多さに応えられることの重要性を十分に認識されておられることの証といえる。

日本人学生の語学教育について、理系学部の学生も含めて、まずは世界共通語の英語教育を強化されておられるのは大学の強みであるが、学部によっては、第二外国語ができればなお有利な就職活動ができることを考慮にいと、英語プラスワンの外国語として、法政大学が最重点国と位置付けるベトナムや中国などの言語が学べる環境が強化され、受講学生が増加することが望まれる。

(4) グローバル施策の内部質保証について

学内に大学評価室を設定され大学全体のグローバル化を評価している。教育研究の高度化、国際化等の評価に加え、PDCA サイクルが適切に維持されているかも含まれている。教員のみならず、職員にも国際化の必要性が十分に認識されており、若い職員が自主的に対応策を検討する部会を開設されたことは企画調整力を高めるうえでも評価されることである。日本学術振興会などで実施されている職員の国際化プログラムに参加されることも検討されたい。

今後は語学基準を満たす学生をいかに増やすか、基礎学力のある外国人学生をいかに確保するか、や海外の高校生が入学を希望する大学にするための工夫などより高度な施策が要求されてくるであろう。

(5) 留学生に対応する手引きなどの印刷物が外国語化されており（英語のみならず、中国語、韓国語があるものもある。）内容も充実してきている。現在印刷中の「GO GLOBAL HOSEI 2017」は思わず読みたくなるような親しみやすさを覚える構成になっており、留学生や国際交流を視野にいれている学生にとっては貴重な印刷物になっている。

(6) グローバル・ポイント制の導入は今後とも国際化を進めるうえで目安になり、励みにもなる制度で引き続き充実されたい。また、インターンシップで災害をとりあげられ陸前高田を対象にされているが、災害大国ニッポンらしい取り組みで、災害のある国からの留学生のみならず防災を学ぶ者にとって魅力あるものである。

「法政大学の国際化に関する評価所見」

山田 史郎

昨年度から引き続いて、高大接続から教職員研修まで、トータルなグローバル化をめぐり、総長以下、全学をあげて取り組まれている姿に感銘を受けた。特に、海外協定校の拡充、英語学位プログラムの増設とそれに伴う学生サービスの整備、国際バカロレアや英語外部試験の利用などグローバル化対応入試改革の推進などで著しい成果が見られる。その一方で、挑戦的な成績評価制度の改革・ハイブリッド・ディグリー制度・デザイン工学研究科国際プログラム開設など、SGUの構想調書で明示された計画のいくつかについて実施の遅延がみられるが、インタビューで回答されたように真摯に実現の道を探られていることには、好感を覚えた。是非、今後も実現に向けて努力を積み重ねていただきたい。派遣・受入学生の修学支援・生活支援・危機管理、およびグローバル化諸施策の内部質保証システムについても、細やかな態勢が整いつつあると認める。

今年度は、特に英語学位プログラムの諸課題について精査を試みた。先行するGMBAに加えて、大学院総合理工学インスティテュート（IIST）、経営学部グローバルビジネスプログラム（GBP）、人間環境学部持続可能社会共創プログラム（SCOPE）の3プログラムが発足したことは、今年度の最大の成果として高く評価できる。関係された学部・研究科の関係者の労に敬意を表したい。とりわけ法政大学をはじめとする大規模私大にとって、既存の大規模学部の本格的なグローバル化はきわめて重要であるが、実現のためのハードルが高い課題でもある。その点で、学部レベルの英語学位プログラム、とりわけ経営学部のGBPの定着と発展には、法政大学内のみならず、広く大手私大各方面から、大きい期待が寄せられよう。その上で、インタビューでは今後の展望に関していくつか質問をさせていただいた。かかる英語学位プログラムに共通する課題は、プログラムを修了しうる英語力・基礎学力、あるいはメンタル面での成熟を備えた外国人留学生を、今後も安定的に確保していくことができるかどうかである。海外指定校や海外向け広報活動など取り組むべき課題をしっかりと認識されておられることに安心感をいただいたが、一定数の受験者数を確保して選抜する態勢を今後も拡充されるよう希望する。

他方で、この英語学位プログラムを、学部・研究科内の「出島」にしてしまっただけでは、いかにも惜しい。現状では定員が10～15名程度であるが、一般の日本人学生と交わる多様な仕掛けを積極的に構築していただきたい。とくに、インタビューで回答されたが、

日本人学生による英語学位プログラム科目の履修を促進する仕組みを確立することは重要であろう。そのことによって、より多くの学生のグローバル・マインドを全学的に涵養する起爆剤としてほしい。

法政大学のグローバル化は、初期始動の段階から、定着・拡充の段階へとステージが移るが、大手私大として学生への目線を中心に据えたより一層の取り組みを期待したい。

以上